

# 学校における清掃活動の実態と教育効果の再考 —「無言清掃」に対する教職員と生徒の意識調査から—

湯本 さや，長谷川 万由美

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第73号 別刷

2023年3月



# 学校における清掃活動の実態と教育効果の再考 —「無言清掃」に対する教職員と生徒の意識調査から—

Research on the Actual Conditions and Educational Effects of  
Cleaning Activities in Schools

—A Survey of Teachers' and Students' Attitudes toward  
“Silent Cleaning”—

湯本 さや<sup>†</sup>, 長谷川 万由美<sup>‡</sup>  
Saya YUMOTO, Mayumi HASEGAWA

## 概要 (Summary)

学校における清掃活動の現状を把握し、その教育効果について再考することを目的とした栃木県栃木市の公立小中学校への実態調査の結果、児童生徒に無言で清掃をさせている学校が多いこと、その目的については小学校と中学校において差異が見られることを確認した。また、筆者の勤務校の教職員及び生徒への意識調査の結果、教職員・生徒ともに学校の清掃活動は一定の教育的意義があると認めていること、その一方で「無言清掃」の実施については教職員と生徒の評価が一致しておらず、多くの生徒は現状の「無言清掃」について見直したいと考えていることが明らかになった。

キーワード：清掃活動、校内清掃、無言清掃、自問清掃、特別活動、生徒指導

## 1. 研究の目的及び方法

日本では、児童生徒及び教職員によって学校の清掃が日常的に行われている。多くの公立小中学校では日課として清掃の時間が設けられ、教育活動の一環として教員がその指導にあっている。このように学校の清掃はその教育的意義が認められながらも学習指導要領において明確に義務づけられた活動とは言い難く、各学校が独自に編成する教育課程として実施されてきた。したがって清掃活動の方法や内容は各学校によって大きく異なる。

特に筆者が勤務する栃木県南部では「無言清掃」、児童生徒が無言で行う清掃活動が広く定着している。清掃の意味について自ら問うという点から「自問清掃」や、黙って清掃を行うという点から「黙働」とも呼ばれる。この独自の清掃活動は、無言で黙々と清掃することで自分と向き合い、様々な気付きを得るというものだが、清掃そのものよりも公共心や規範意識、自立心の醸成など道徳的な効果を強調することの弊害も指摘される(杉原, 2019)。また、「無言清掃」の教育効果に関する実証研究の必要性や、学校清掃の現代化の必要性についても問われている(山本, 2019)。栃木県南部における「無言清掃」の普及と背景については、現職教員への半構造化インタビュー調査から、学校の「荒れ」

<sup>†</sup> 栃木市立藤岡中学校

<sup>‡</sup> 宇都宮大学 共同教育学部 (連絡先: mayumit@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

に対応するために「無言清掃」や「自問清掃」が導入されたことや、それらをもとに各学校に合った形で定着させていく「自校化」を図りながら、児童生徒が無言で行う清掃が各学校に広がったことが示唆された(湯本・長谷川、2022)。また、「無言清掃」には多様な実践があり、一定の効果をj得ているものの、教師の負担が大きいことなども指摘されている(表、2022)。これらを踏まえつつ、学校の清掃活動、とりわけ児童生徒が無言で清掃をすることの教育効果について検討するには、当事者である児童生徒や教職員がどのような意識で取り組んでいるのかを明らかにすることが必要である。

そこで本研究では、栃木県栃木市内の公立小中学校を対象とする清掃指導の実態調査や、筆者の勤務する中学校の教職員及び生徒を対象とする「無言清掃」についての意識調査を実施し、それぞれの調査結果を分析・検討する。その上で、学校の清掃活動(主として「無言清掃」)の教育効果についての再考を試みる。

## 2. 学校における清掃活動の現状 —栃木県栃木市を事例として—

### 2.1 調査概要

学校における清掃活動の現状について把握するため、栃木県栃木市内の公立小中学校43校を対象に、学校の清掃活動についての実態調査を行うこととした。学校の清掃活動は地域によってその方法や内容が異なると考えられるため、本研究では調査対象を著者の勤務地である栃木県栃木市に限定し、清掃活動の現状について考察する。質問紙は、校務分掌等で清掃活動を担当している教員(各学校1名)対して送付した。調査期間は2021年7月21日～8月20日までとし、回答をGoogleフォームまたは郵送にて回収した。なお、調査にあたっては、倫理的配慮として学校名や個人が特定されないことがないことを明記している。43校中36校から回答を得た(回収率83.7%)。

調査内容は、(1)清掃活動の有無(回数、時間)、(2)清掃活動の名称、(3)清掃活動の主体は誰か、(4)学校で児童生徒が清掃をすることの理由、(5)清掃活動の班編制、(6)清掃活動前の児童生徒の動き、(7)「清掃活動は無言で行う」というまじりの有無と内容、さらに清掃を無言で行う学校に対してのみ(8)いつ頃から、(9)どのような目的で行っているのか、(10)清掃活動終了後の児童生徒の動き、(11)学校の清掃活動に関して気付いた点(課題など)である。

小中学校では学習指導要領及び同解説での清掃の記載に違いがあることや、分析した結果が小中学校で異なることから、以下では小中学校ごとに比較する形で結果を報告する。

### 2.2 調査結果

#### 2.2.1 清掃活動について

(1) 清掃活動の有無に関しては、全ての小中学校(36校)が「ある」と回答した。清掃活動の実施回数に関しては、「週4回」が小学校では24校中13校(54.2%)、中学校では12校中10校(83.3%)と最も多かった(図1)。また、清掃の活動時間に関しては、「15分間」が小学校では24校中22校(91.7%)、中学校では12校中10校(83.3%)と最も多かった(図2)。

(2) 清掃活動の名称に関しては、「清掃(清掃の時間、特になしも含める)」が小学校では24校中20校(83.3%)、中学校では12校中6校(50%)と最も多かった。その他、小学校では「なかよし清掃(月・水・木・金曜日)・除草清掃(火曜日)」、「まごころ清掃」、「もくもく清掃」、「無言清掃」が用いられていた。中学校では「自問清掃」が4校(33.3%)あり、その他は「無言清掃」、「黙働清掃」の名称が用いられていた。

図1 清掃活動の実施回数 (%)

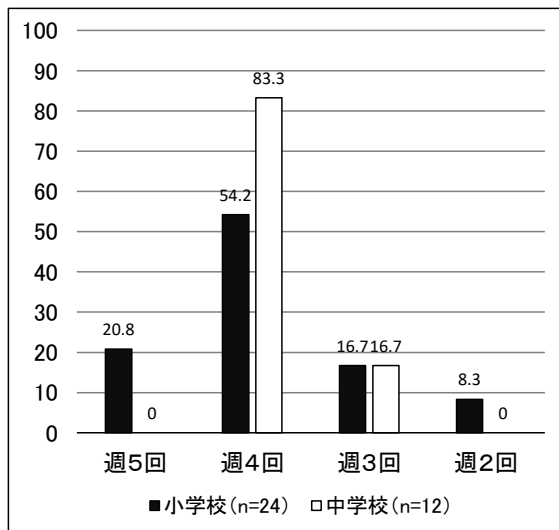
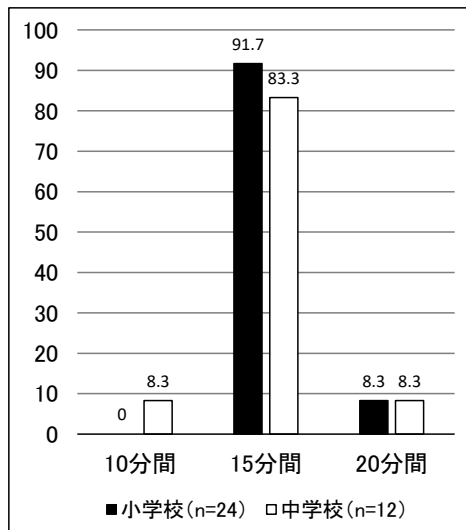
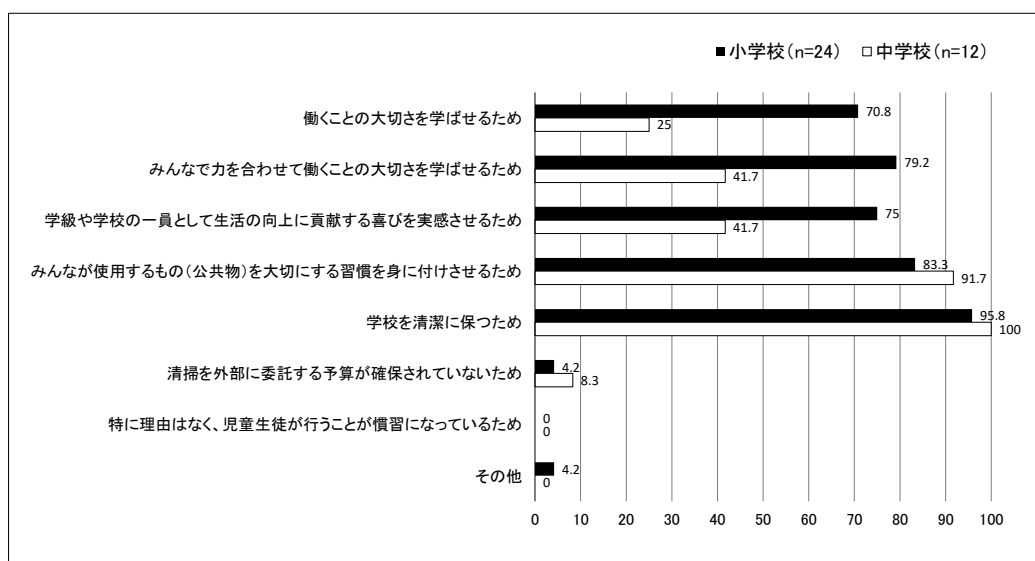


図2 清掃の活動時間 (%)



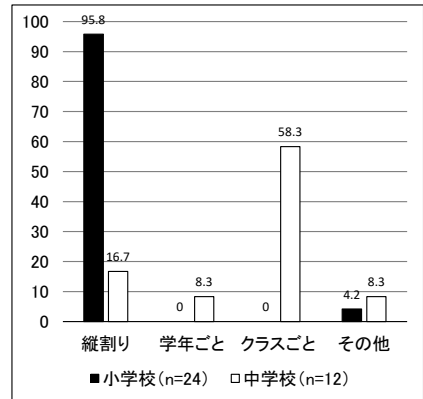
(3) 清掃活動の主体に関しては、全ての小中学校(36校)が「児童生徒と教職員」と回答した。また、(4) 学校で児童生徒が清掃をすることの理由(複数回答形式)については、「学校を清潔に保つため」が、小学校で24校中23校(95.8%)、中学校で12校中12校(100%)と最も多かった。次に多かった回答を順に見ると、小学校では「みんなが使用するもの(公共物)を大切にする習慣を身に付けさせるため」が20校(83.3%)、「みんなで力を合わせて働くことの大切さを学ばせるため」が19校(79.2%)、「学級や学校の一員として生活の向上に貢献する喜びを実感させるため」が18校(75%)、「働くことの大切さを学ばせるため」が17校(70%)となっており、上位4つの回答に関してほとんど差はない。一方、中学校では、次に多い回答は「みんなが使用するもの(公共物)を大切にする習慣を身に付けさせるため」が11校(91.7%)となり、それ以降の回答については5割を下回った(図3)。

図3 「学校で児童生徒が清掃をすること」の理由 (%)



(5) 清掃活動の班編制に関しては、小学校の24校中23校(95.8%)とほとんどの学校が「縦割り(学年を混ぜて班をつくる)」で実施していた。中学校では、「クラスごと(同じクラスで班をつくる)」が12校中7校(58.3%)と最も多く、次いで「縦割り」が2校(16.7%)となっている。小学校と比較すると、中学校では様々な方法で班編制がされていた(図4)。

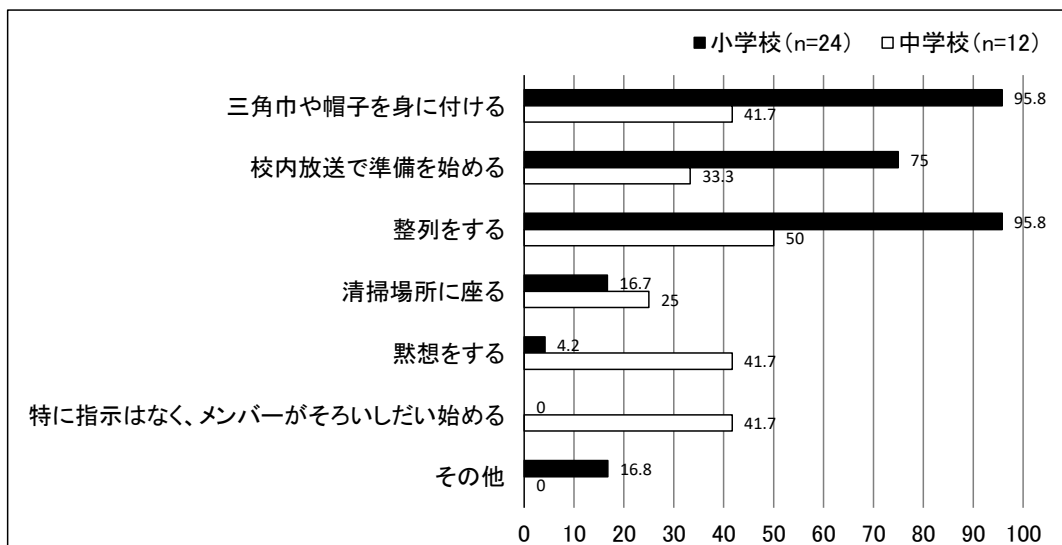
図4 清掃活動の班編制(%)



### 2.2.2 清掃活動前から終了後の児童生徒の動きについて

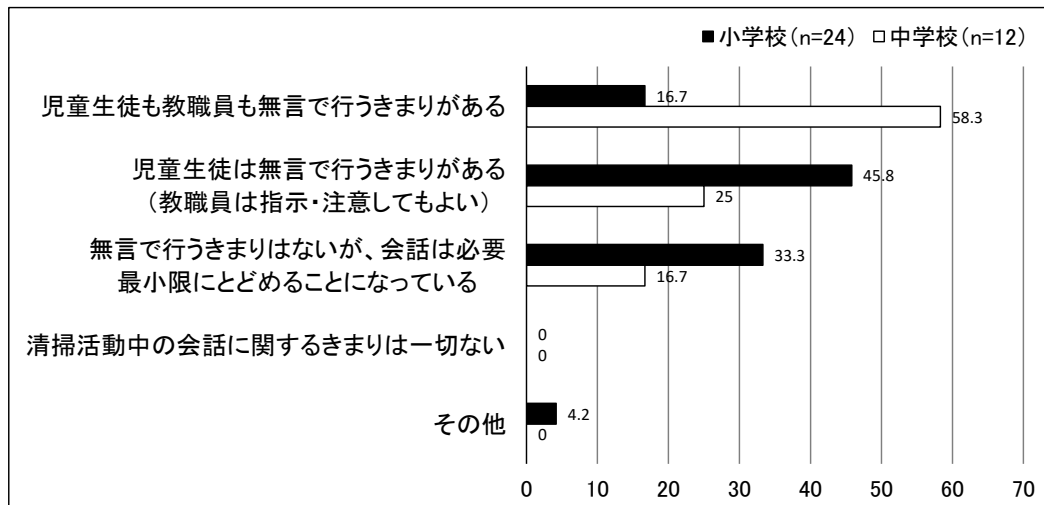
(6) 清掃活動前の児童生徒の動き(複数回答形式)に関しては、小学校で回答が多かったのは「三角巾や帽子を身に付ける」が24校中23校(95.8%)、「整列をする」が23校(95.8%)、「校内放送で準備を始める」が18校(75%)だった。その他として、「あいさつをする」、「班長がめあてを発表する」等が挙げられていた。一方、中学校においても「整列をする」が12校中6校(50%)で最も多かったが、「特に指示はなく、メンバーがそろいしだい始める」も5校(41.2%)あり、各学校によって回答にばらつきがあった。小学校と比較すると「黙想する」も5校(41.2%)と多く、中学校では約半数の学校が清掃前に黙想を実施していることがわかった(図5)。

図5 清掃活動前の児童生徒の動き(%)



(7) 「清掃活動は無言で行う」というさまりの有無と内容に関しては、小学校では「児童生徒は無言で行うさまりがある(教職員は指示・注意してもよい)」が24校中11校(45.8%)、中学校では「児童生徒も教職員も無言で行うさまりがある」が12校中7校(58.3%)で最も多かった。清掃活動中に無言で行う対象とその程度には差があるものの、「清掃活動中の会話に関するさまりは一切ない」とする学校は小中学校ともに見られない(図6)。

図6 「清掃活動は無言で行う」というきまりの有無と内容(%)



続いて、(7)で「児童生徒も教職員も無言で行うきまりがある」と「児童生徒は無言で行うきまりがある(教職員は指示・注意してもよい)」と回答した学校に対して、児童生徒が無言で行う清掃活動を(8)「いつ頃から」、(9)「どのような目的で行っているのか」を質問した。(8)「いつ頃か」に関しては、「5年前以上～」が小学校で15校中8校(53.3%)、中学校で10校中5校(50%)と最も多かった。なお、不明に関しては小学校で「はっきりと分からないがずっと前から、小中一貫で中学校の指導を取り入れた」、「昔から無言清掃が伝統的に続いている」との回答があった。全国において小中一貫した教育課程の編成・実施が推進される中で、栃木市においても義務教育9年間の一貫性のある教育が目指されている。その具体策として清掃活動が取り上げられたと考えられる。中学校は、導入してから5年未満の学校はなく、全体的に小学校よりも導入時期が早い(図7)。また、(9)「どのような目的で行っているのか」に関しては、自由記述形式で回答を得た。その内容をKJ法により分類した結果、主に5つのカテゴリーに分けられた(表1)。複数の要素を含む回答があるため、合計数は回答者数と一致しない。最も多かった回答は、「道徳性の育成」(小学校10件、中学校22件)だった。具体的な内容としては、「思いやり」、「我慢」、「気づき」の心を育むという回答が多く見られた。次に多かった回答は「効率」(小学校9件、中学校4件)であった。具体的な内容としては「集中して取り組ませる」が多く、主に小学校では15校中7校が回答していた。また、現在の社会状況を踏まえた目的として「衛生対策」(小学校3件)も挙げられていた。

図7 「児童生徒が無言で行う清掃」を始めた時期(校)

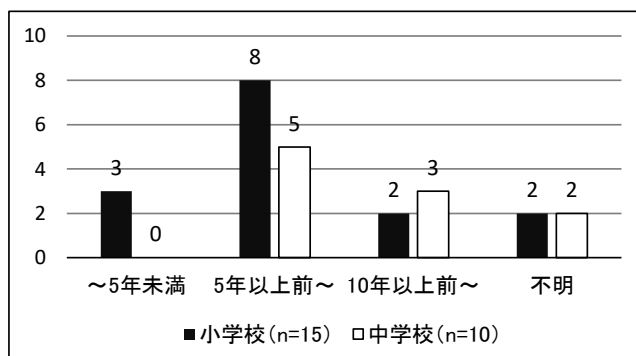
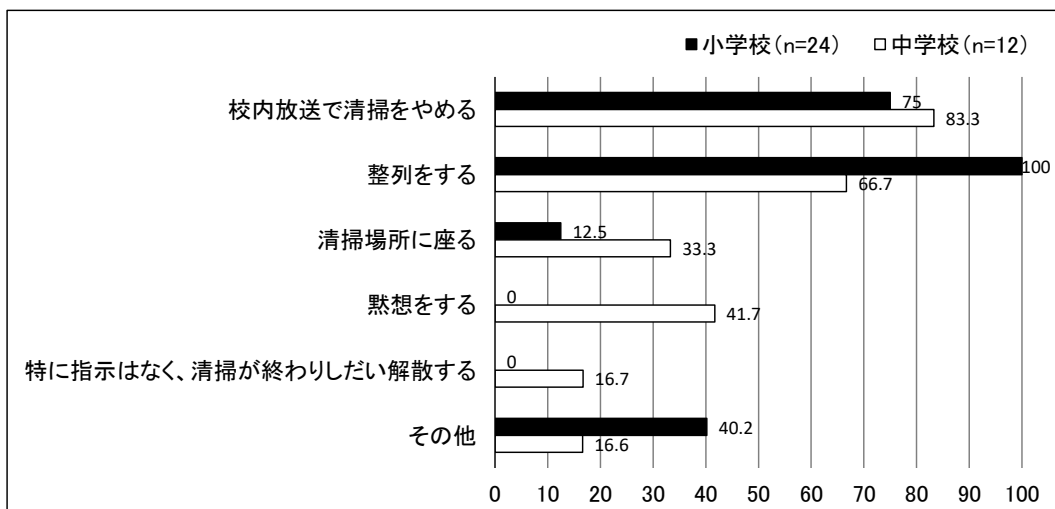


表1 児童生徒が無言で清掃を行う目的(件)

カテゴリー	具体的な内容
道徳性の育成 (32:小10中22)	思いやり(小1中5)、我慢(小1中4)、気づき(小1中4)、自己の内面を磨く(小2中1)、主体性(中3)、自制(中3)、感謝(小1中1)、責任感(小2)、達成感(小1)、自己肯定感(小1)、謙虚(中1)
効率(13:小9中4)	集中して取り組ませる(小7中4)、清掃に専念する(小2)
規律・規範意識の醸成 (5:小3中2)	真面目に取り組ませる(小2)、自律(中2)、はじめをつけさせる(小1)
衛生対策(3:小3)	コロナ対策(小2)、衛生対策(小1)
小中連携(1:小1)	中学校がやっているから(小1)

最後に(10)清掃活動終了後の児童生徒の動き(複数回答形式)に関しては、「整列をする」が小学校では24校中24校(100%)、中学校では12校中8校(66.7%)、「校内放送で清掃をやめる」が小学校では18校(75%)、中学校では10校(83.3%)と回答が多かった。中学校では(6)「清掃活動前の児童生徒の動き」と同様に、各学校によって回答にばらつきがあった。特に「黙想をする」が5校(41.7%)、「清掃場所に座る」が4校(33.3%)あり、小学校との差が見られる。小学校はその他の回答として「あいさつをする」が4校、「反省を行う」が5校が多く見られた(図8)。

図8 清掃活動終了後の児童生徒の動き(%)



### 2.2.3 清掃活動の課題

(11)学校の清掃活動に関して気付いた点(課題など)について、自由記述形式で回答を得た(小学校9校、中学校6校)。以下の表は、その内容を分類し整理したものである(表2)。複数の要素を含む回答があるため、合計数は回答者数と一致しない。

最も多かったのは「無言清掃」に関する記述であり、具体的には「無言清掃」を実施する上での課題と児童生徒へ無言で清掃を行わせることへの疑問が挙げられていた。続けて、清掃用具や衛生面についての記述も見られた。



表2 学校の清掃活動に関して気付いた点(課題など)(件)

カテゴリー	具体的な内容
無言清掃について (7:小3中4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・無言が徹底できない(小1中2)</li> <li>・教員側の意識定着が図られていない(小1中1)</li> <li>・無言を第一義とせず、きれいにすることを大切にしたい(中1)</li> <li>・無言で行う意味がわからない(小1)</li> </ul>
清掃用具について (3:小3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・用具の使用法や清掃の手順のわからない児童が多い(小2)</li> <li>・近年の生活様式に合わせた用具を導入してほしい(小1)</li> </ul>
衛生面について (2:小2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トイレ掃除の方法が難しい(小1)</li> <li>・コロナ対策などで制限があり、十分に清掃できない(小1)</li> </ul>
その他 (6:小4中2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ、三角巾の徹底(小1)</li> <li>・人手不足(中2)</li> <li>・短時間で効率的な清掃方法、清潔を意識した生活について(小1)</li> <li>・上級生が下級生の面倒をよく見ている(小1)</li> <li>・清掃強調週間を設けている(小1)</li> </ul>

### 2.3 考察

上記の調査結果を踏まえ、栃木県栃木市を事例とした学校における清掃活動の現状について考察を試みる。

- (1) 回答を得た全ての学校において、児童生徒と教職員を主体とした清掃活動が行われている。
- (2) 学校で児童生徒が清掃をする理由について、小中学校ともに「学校を清潔に保つため」という回答が最も多かった。しかし小学校では、学習指導要領「特別活動」に示されている勤労、協力、所属集団に対する貢献、公德心・公共心なども理由として多く挙げられている。すなわち、学習指導要領における位置づけとしては弱いものの、清掃について学習指導要領に記載されている小学校と、記載のない中学校において清掃の捉え方には違いが見られる。小学校においては、学習指導要領を踏まえた教育活動としての清掃という側面が強いと考えられる。
- (3) 回答を得た全ての学校において、清掃活動中の児童生徒の会話に関して何らかの制約が設けられていた。中学校では生徒だけでなく教職員も無言で清掃を行うとする学校が多く、小学校では児童は無言で清掃を行うきまりがあるが、教職員は指示・注意してもよいとする学校が多い。これは児童生徒の発達段階を考慮した結果の差であると考えられる。また、児童生徒が無言で清掃を行うのは、小学校は効率面、中学校は道徳性の育成を目的とした学校が多かった。ここで着目したいのは、清掃活動前と終了後の黙想の有無である。小学校では黙想を行う学校はなかったが、中学校では12校中5校が黙想を行っている。そして、黙想を行う中学校はすべて「無言清掃」の実施校であった。中学校において清掃活動前と終了後に黙想を行っている学校が多いのは、道徳性の育成が重視されていることが背景にあると推察される。黙想は、禅行の影響を受けて考案された竹内隆夫の「自問清掃」の手法としても用いられることがあり、道徳性の育成を重視する清掃活動の一部と捉えるほうが自然である。また、国立教育政策研究所の生徒指導研究センター(2006)が「基本的な生活習慣や学校内の規律の徹底による生徒指導の充実例」として「無言清掃」の他に「1分間黙想」も取り上げており、生徒指導の側面から導入している学校も多い。これらの理由から、中学校に清掃活動前と終了後に黙想が多く取り入れられていると考えられる。
- (4) 清掃活動の課題については、「無言清掃」に関することが多かった。清掃活動中の児童生徒の会話に関して何らかの制約が設けている反面、無言で清掃を行わせることの難しさも感じていることがわかる。これは教職員の共通理解の難しさと、多様な児童生徒がいる中で無言を徹底する指導には限界があることを示唆している。

以上のように、栃木県栃木市内の小中学校では児童生徒に無言で清掃をさせている学校が多く、その目的については小学校と中学校において差異が見られることが確認できた。一方で、児童生徒に無言で清掃をさせることに対する難しさや疑問を課題として挙げていることにも着目したい。児童生徒の実態、教員の働き方、社会状況が変化している現在において、新たな清掃活動の在り方を模索する必要があろう。

### 3. 学校における清掃活動の教育効果 ―教職員と生徒の意識調査から―

#### 3.1 調査概要

前述した学校における清掃活動の現状を踏まえた上で、教育効果を検討するために筆者の勤務校の教職員及び全校生徒を対象に意識調査を実施した。筆者の勤務校は、栃木県栃木市内に位置する公立中学校である。なお、勤務校では「無言清掃」が行われている。清掃では三角巾を着用し、清掃活動前と終了後には清掃場所に座って黙想をする。指示は全て校内放送による。教育計画に示される清掃活動のねらいは、愛校心の育成、4つの心(我慢の心、自制する心、気付きの心、思いやりの心)を意識させることで心の成長を目指す、責任感、勤労、奉仕の精神を育むとしている。

調査期間は教職員が2021年6月9日、生徒が2021年7月2～9日とし、Googleフォームにて回答を得た。なお、調査は無記名とし、倫理的配慮として個人が特定されることがないことを明記している。教職員24名中24名(回収率100%)、生徒311名中290名(回収率93.2%)から回答を得た。

調査内容は、教職員に対しては(1)学校の清掃活動が好きか、(2)学校で生徒が清掃をすることについて教育上重要だと思うか、(3)学校で生徒が清掃をすることの理由、(4)清掃活動の時間、(5)清掃活動の回数、(6)生徒に無言で清掃をさせることについてどう思うか、(7)「無言清掃」のねらいは達成されているか、(8)学校の清掃活動に関して気付いた点(課題など)である。生徒に対しては、<1>卒業した小学校での清掃活動の有無、<2>小学校での清掃活動が好きだったか、<3>小学校における「清掃活動は無言で行う」というきまりの有無、<4>小学校で何のために清掃活動をしていると思うか、<5>中学校の清掃活動が好きか、<6>生徒が清掃をすることについてどう思うか、<7>中学校で何のために清掃活動をしていると思うか、<8>中学校での清掃活動の時間、<9>中学校での清掃回数、<10>無言で清掃することについてどう思うか、<11>「無言清掃」のねらいについて聞いたことがあるか、<12>「無言清掃」をすることで、自分の心が成長していると感じるか、<13>これからも「無言清掃」を続けていきたいか、である。

#### 3.2 調査結果

##### 3.2.1 教職員の意識調査の結果

(1)学校の清掃活動が好きかに関しては、肯定的な回答(「好き」、「まあまあ好き」)が約5割、否定的な回答(「あまり好きではない」、「好きではない」)が約5割だった(図9)。

一方で、(2)学校で生徒が清掃することについて、「教育上重要である」、「教育上必要である」との回答は9割近くを占めた(図10)。ここから、学校の清掃活動は好きではないが、生徒にとっては教育上重要あるいは必要であると考えている教職員が多いことがわかる。

図9 学校の清掃活動が好きか(%) (N=24)

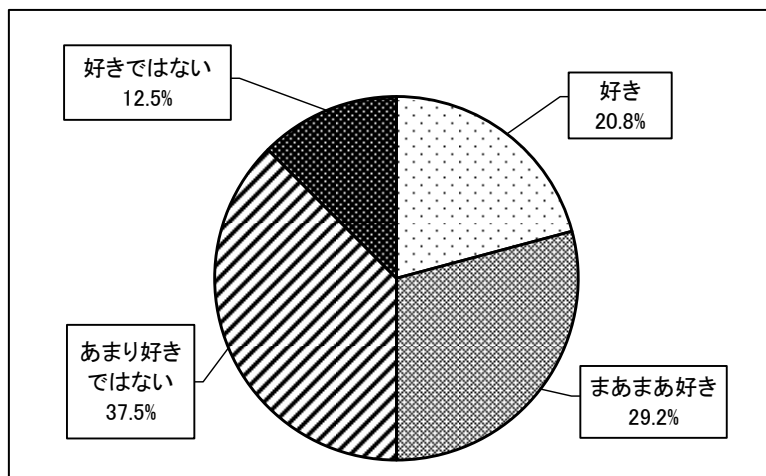
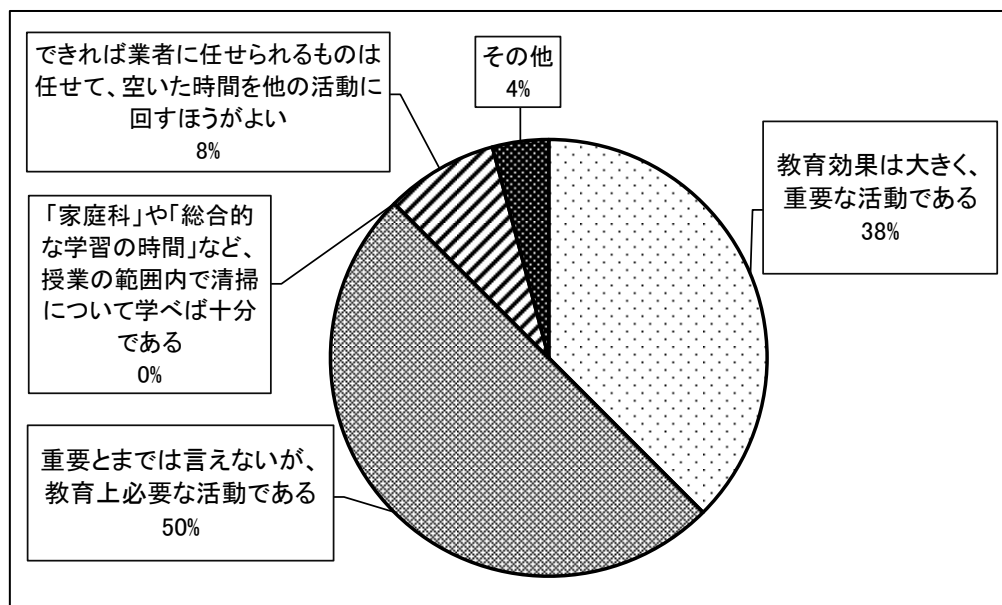
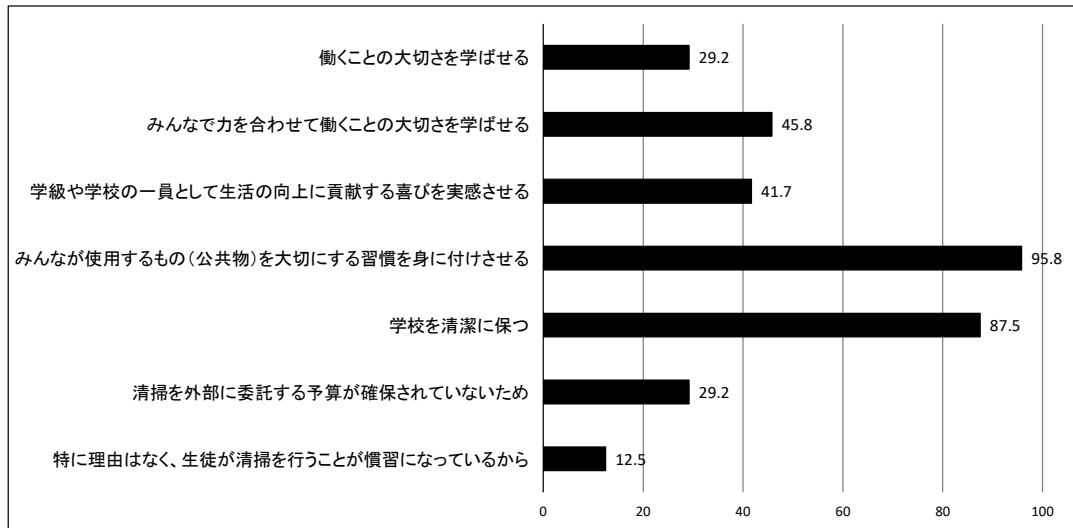


図10 学校で生徒が清掃をすることについて教育上重要だと思うか(%) (N=24)



(3) 学校で生徒が清掃をすることの理由(複数回答形式)に関しては、「みんなが使用するもの(公共物)を大切にする習慣を身に付けさせる」が24人中23人(95.8%)で一番多く、「学校を清潔に保つ」が21人(87.5%)で二番目に多かった。公德心を身に付けさせることや衛生の観点から清掃活動をさせるという意識が強いといえる(図11)。

図11 学校で生徒が清掃をすることの理由(%) (N=24)



(4) 清掃活動の時間(約15分)は、「適切である」が約8割である(図12)。また、(5) 清掃活動の回数(週4回)は、「適切である」が約6割で、「もっと回数を減らしてもよいと思う」が約3割だった(図13)。回数については、清掃内容も考慮しながら検討する必要があるだろう。

図12 清掃活動の時間(15分間)(%) (N=24)

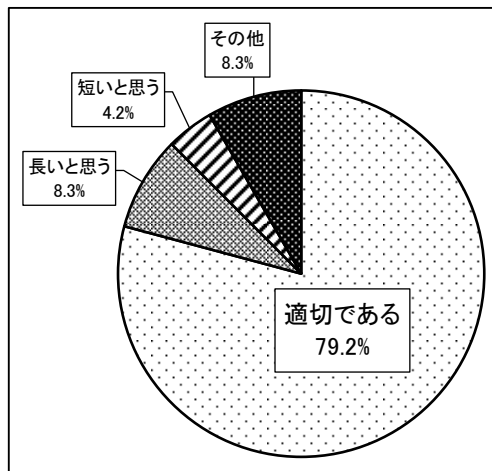
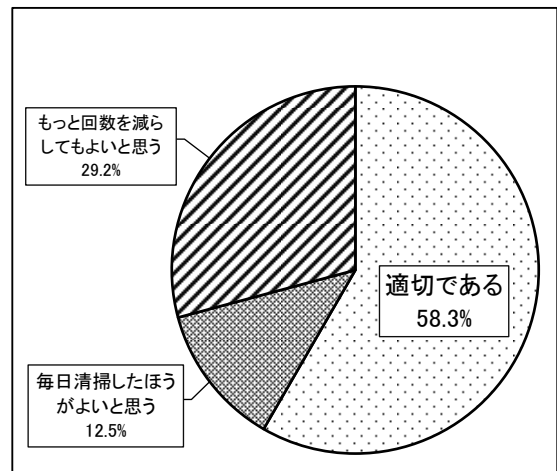


図13 清掃活動の回数(週4回)(%) (N=24)

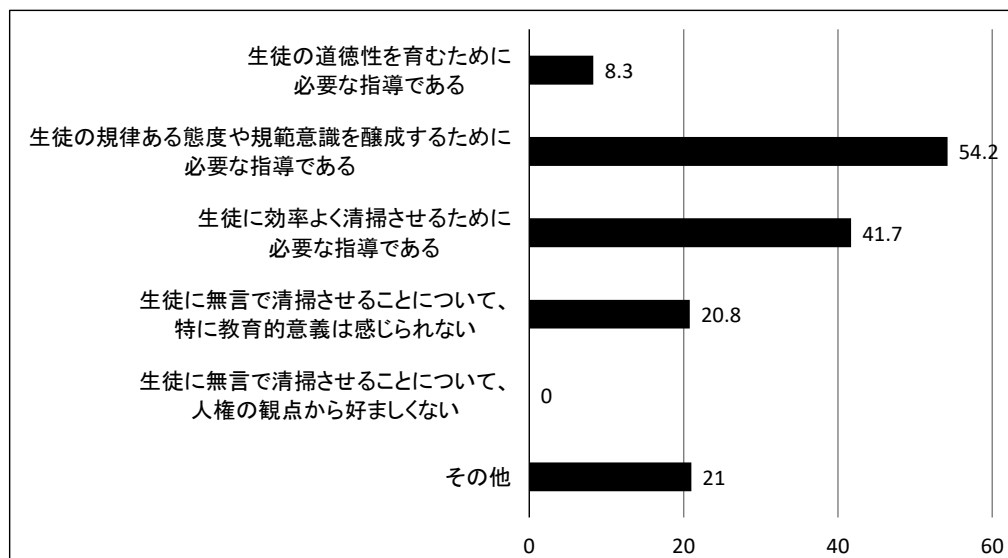


(6) 生徒に無言で清掃をさせることについてどう思うか(複数回答形式)に関しては、「規律ある態度や規範意識を醸成するために必要な指導」が24人中13人(54.2%)で一番多く、「生徒に効率よく清掃させるために必要な指導」が10人(41.7%)で二番目に多かった(図14)。

(3)の学校で生徒が清掃をすることの理由では、道徳性の育成(勤労、協力、公共心、公德心など)も多く回答されていたが、(6)の生徒に無言で清掃させることについてどう思うかでは、道徳性の育成を理由としている回答が非常に少ない。つまり、学校で生徒が清掃をする理由と、生徒に無言で清掃させることについては違いが見られる。生徒に無言で清掃させることについては、道徳性の育成よりも規範意識を醸成する生徒指導の具体的かつ実践的な取組の手段として捉えられている。また、「生徒に無言で清掃させることについて、特に教育的意義は感じられない」との回答も24人中5人(20.8%)

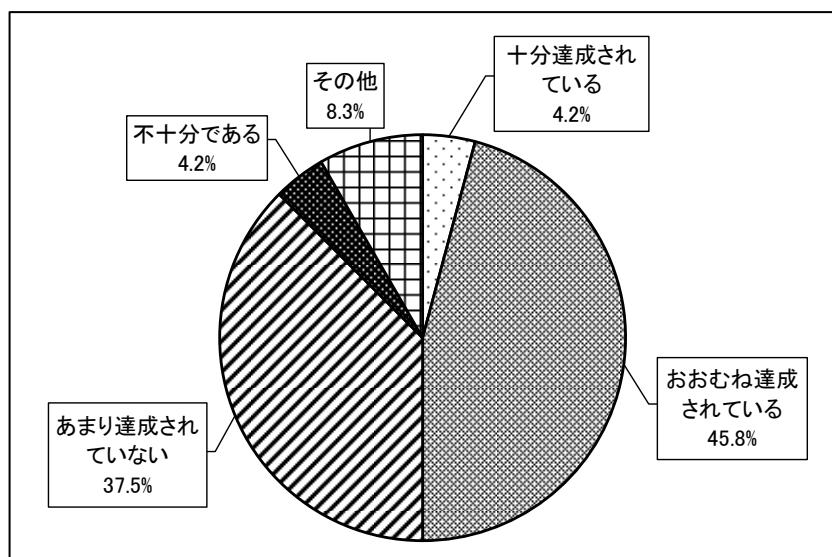
いること、さらに「その他」と回答した5人中3人は「無言が目的化してはいけない」「必要に応じて会話も必要」といった、「無言清掃」に対して懐疑的な回答だった。つまり、教職員24人中8人(33.3%)は、生徒に無言で清掃させることについて否定的または消極的な見方をしているといえる。

図14 生徒に無言で清掃させることについてどう思うか(%) (N=24)



(7)「無言清掃」のねらいは達成されているかに関して、肯定的な回答(「十分達成されている」、「おおむね達成されている」)が約5割、否定的な回答(「あまり達成されていない」、「不十分である」)が約4割だった(図15)。生徒に無言で清掃をさせることについて、道徳性の育成を理由としている回答が非常に少ない(図14)ため、「無言清掃」のねらいを「心の成長」とすることには難しさがあると考えられる。

図15 「無言清掃」のねらい(生徒の心の成長)は達成されているか(%) (N=24)



最後に、(8)学校の清掃活動に関して気付いた点(課題など)について、自由記述形式で回答を得た(24人中13人)。以下の表は、その内容を分類し整理したものである(表3)。複数の要素を含む回答があるため、合計数は回答者数と一致しない。

最も多かったのは「無言清掃について」(8件)である。具体的には、生徒に目的や意義が理解されていないと感じていたり、徹底されていないと感じていたりする回答が多かった。また、「トイレ掃除について」、「方法や内容について」、「清掃活動の是非」などの記述も見られた。(2)では清掃活動は教育上必要であるとの回答が約9割(図10)だったが、その方法や内容には工夫や改善の余地があると考えていることがうかがえる。

表3 学校の清掃活動に関して気付いた点(課題など)(件)

カテゴリー	具体的な内容
無言清掃について(8)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒にきちんと目的や意義を理解させるべき(3)</li> <li>・無言清掃の徹底ができていない(2)</li> <li>・もっと自ら考えて活動できる生徒を育てたい(2)</li> <li>・やるなら教職員の共通認識が必要(1)</li> </ul>
トイレ掃除について(2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・衛生の観点からトイレ掃除は業者に任せるべき(1)</li> <li>・トイレ掃除は全員が経験すべき(1)</li> </ul>
方法や内容について(2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・放課後の当番制にしてもよいと思う(1)</li> <li>・整列、黙想、放送による指示は不要(1)</li> </ul>
清掃活動の是非(2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・業者委託でもよい(2)</li> <li>・生徒による清掃活動は必要(2)</li> </ul>

### 3.2.2 生徒の意識調査の結果

<1>卒業した小学校での清掃活動の有無は、290人中287人(99.3%)があったと回答した。次に、<2>小学校での清掃活動が好きだったか(図16)、<5>中学校での清掃活動が好きか(図17)を比較していきたい。小学校では、肯定的な回答(「好き(だった)」、「まあまあ好き(だった)」)が47.6%、中学校では54.7%と、中学校の方がやや高いものの大きな差は見られない。小学校の頃も現在においても、約半数の生徒が清掃活動に対して肯定的な姿勢を示している。

図16 小学校での清掃活動が好きだったか(%) (n=288)

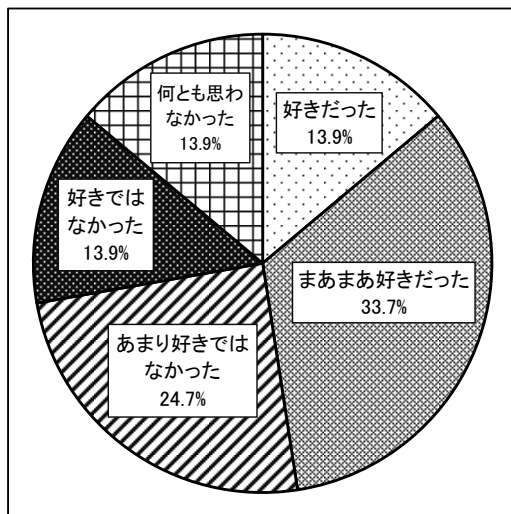
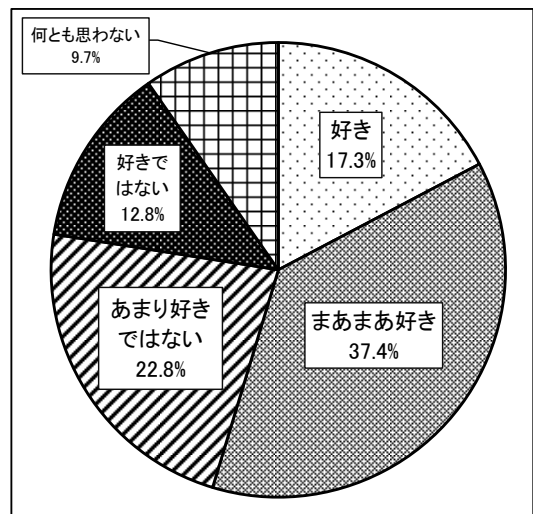
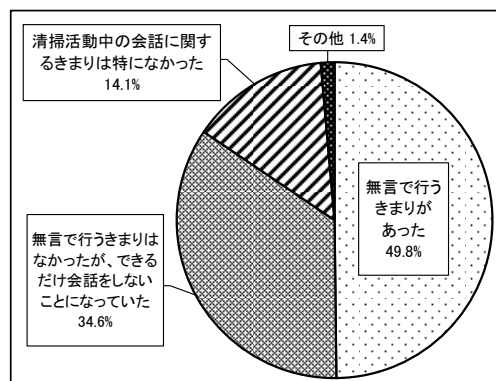


図17 中学校での清掃活動が好きか(%) (n=289)



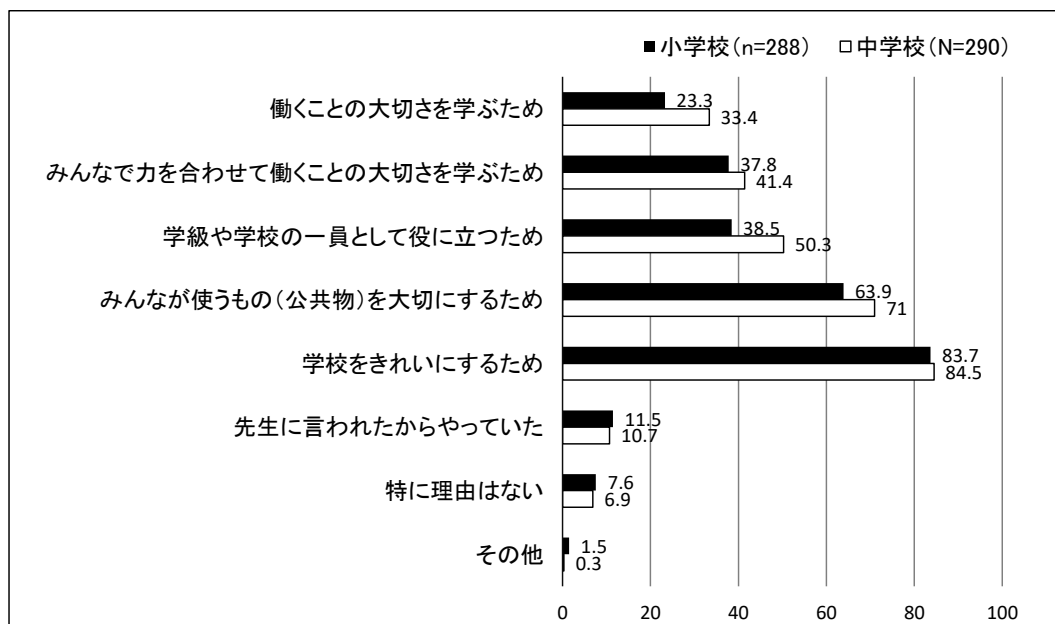
<3> 小学校における「清掃活動は無言で行う」というきまりに関しては、「無言で行うきまりがあった」が約半数、さらに会話に制約があった割合も合わせると8割以上となる(図18)。ここから、小学校の頃から無言で行う清掃を経験している生徒が多いことがわかる。

図18 小学校における「清掃活動は無言で行う」というきまりの有無(%) (n=283)



<4> 小学校で何のために清掃活動をしていたと思うか(複数回答形式)、<7> 中学校で何のために清掃活動をしていると思うか(複数回答形式)に関して比較すると、小学校と中学校で回答に大きな差は見られない。いずれも「学校をきれいにするため」が最も多く、8割を超えている。次に「みんなが使うものを(公共物)を大切にするため」が多く、小学校で63.9%、中学校で71%だった(図19)。

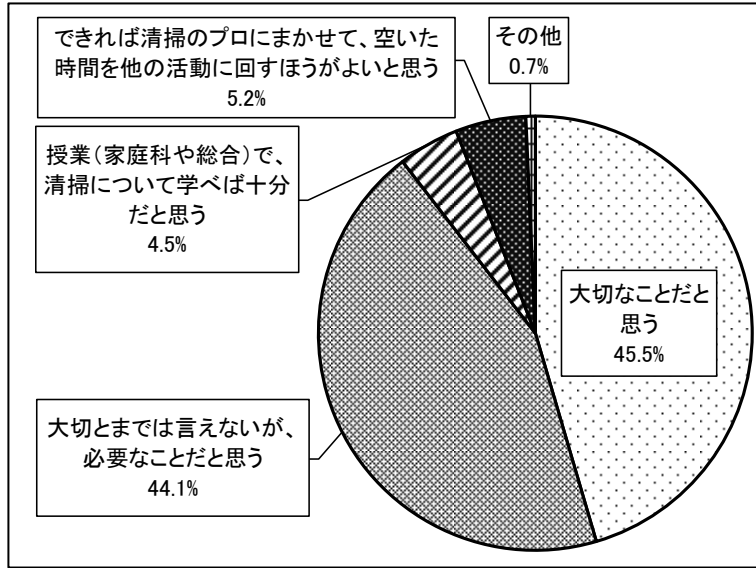
図19 何のために清掃活動をしていた(している)と思うか(%)



ここから、中学校の清掃活動に限定した調査項目について述べていきたい。

<6> 生徒が清掃することについてどう思うかに関して、「大切なことだと思う」、「大切とまでは言えないが必要なことだと思う」を合わせると、約9割近くとなる(図20)。<5>の中学校の清掃活動が好きかに対して、肯定的な回答をしている生徒が約半数だったことを踏まえると、学校の清掃活動はあまり好きではなくても、清掃をすることは大切(必要)だと考えている生徒が多いことがわかる。

図20 生徒が清掃することについてどう思うか (%) (n=286)



次に、中学校での清掃活動の<8>時間と<9>回数についてである。清掃活動の時間は「ちょうどいい」が70.4% (図21)、回数も「ちょうどいい」が67.5% (図22)と一番多く、いずれも7割前後の生徒が適切であると考えている。但し、回数に関しては、「もっと回数を減らしてもいいと思う」が286人中77人(26.9%)いることにも言及しておきたい。

図21 清掃活動の時間(15分間) (%) (n=281)

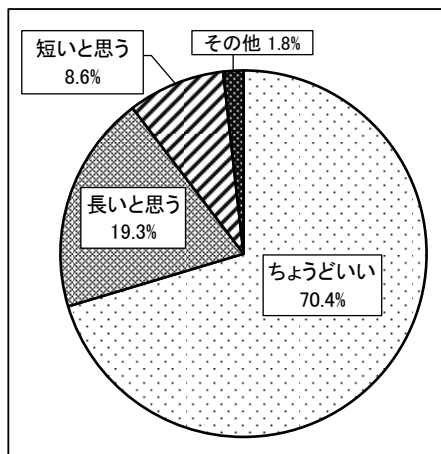
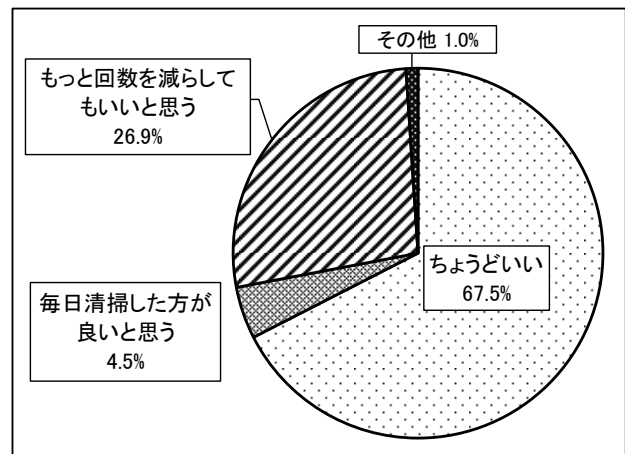


図22 清掃活動の回数(週4回) (%) (n=286)



最後に、「無言清掃」についての調査項目である。

<10>無言で清掃することについてどう思うか(複数回答形式)に関して、「清掃するときでも必要な会話もあると思う」が288人中166人(57.6%)と一番多かった。しかし、「きまりを守ろうとする気持ちをもつために必要である」(55.2%)や「効率よく清掃するために必要である」(51.4%)と、その割合に大きな差はない(図23)。ここで、回答の組み合わせに着目したい。無言で清掃することに対して肯定的な回答(心を成長、きまりを守ろう、効率よく)と消極的な回答(必要な会話もある、会話をした方が、意味を感じない、つらい)の両方を選択している生徒が290人中130人(44.8%)



いることがわかる(表4)。この結果は、生徒が「無言清掃」に一定の理解は示しつつも、その方法や内容には疑問を感じていることを示唆しているであろう。

図23 無言で清掃することについてどう思うか(%) (n=288)

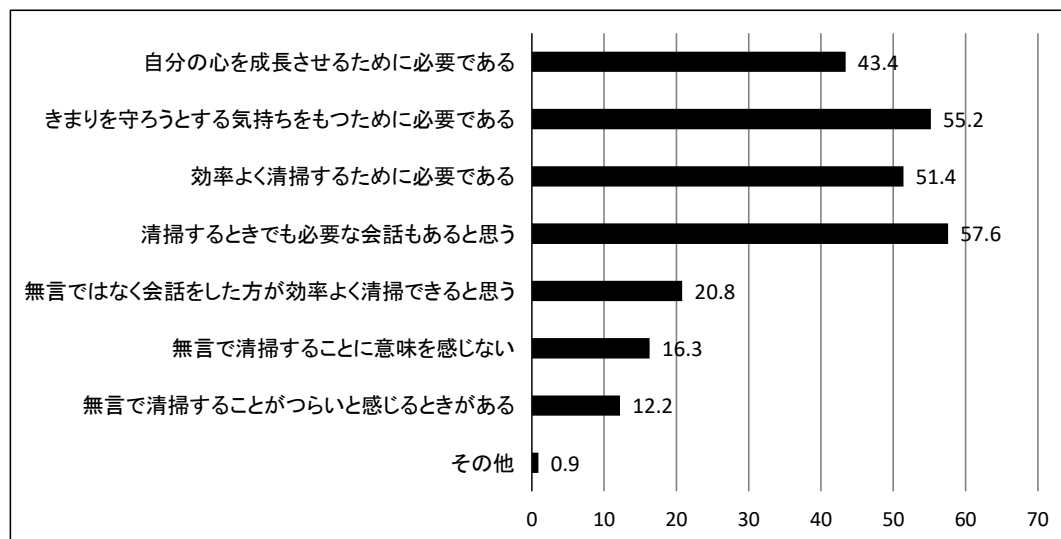


表4 <10>における回答の組み合わせ(%) (N=290)

肯定的な回答のみ (85)	肯定・否定が混在 (130)	否定的な回答のみ (71)	その他 (2)	無回答 (2)
29.3%	44.8%	24.5%	0.7%	0.7%

<11>「無言清掃」のねらい(自分の心を成長させる)について聞いたことがあるかに関しては、「聞いたことがあるし内容も知っている」が28.9%しかなく、生徒にねらいが浸透しているとは言い難い(図24)。そのため、<12>そのねらいの達成についても、肯定的な回答(「とても感じる」、「まあまあ感じる」)が約半数(54.6%)にとどまっている(図25)。

図24 「無言清掃」のねらいについて聞いたことがあるか(%) (n=287)

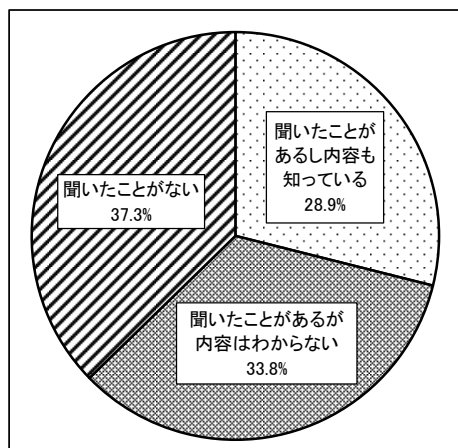
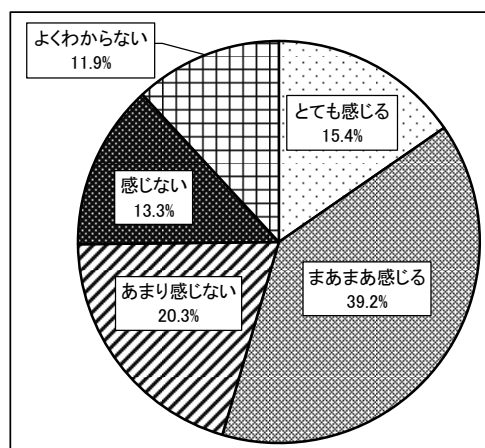
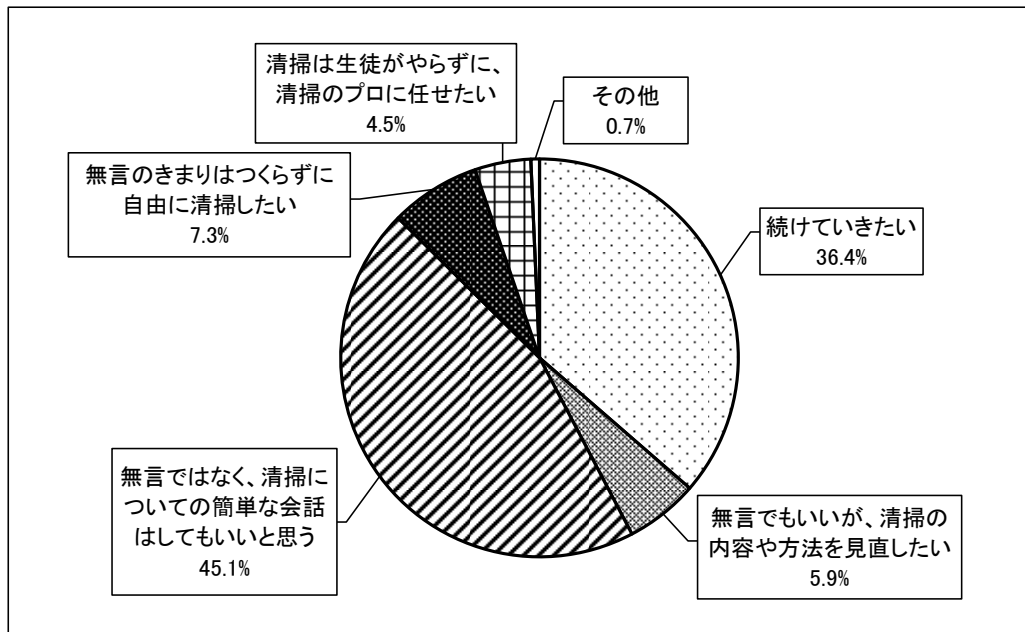


図25 「無言清掃」をすることで、自分の心が成長していると感じるか(%) (n=286)



<13> これからも「無言清掃」を続けていきたいかに関しては、「無言ではなく、清掃についての簡単な会話はしてもいいと思う」が286人中129人(45.1%)と一番多く、「無言のきまりはつくらずに自由に清掃したい」21人(7.3%)と合わせると、約半数の生徒が無言ではない清掃活動を望んでいる。一方、「続けていきたい」が104人(36.4%)で二番目に多いものの、その割合からも現状の「無言清掃」を否定しないものの何らかの工夫・改善を求めている生徒が多いと考えられる(図26)。

図26 これからも「無言清掃」を続けていきたいか(%) (n=286)



### 3.3 考察

上記の調査結果を踏まえ、教職員と生徒の清掃活動に対する意識の共通点と相違点を整理し、その教育効果についての考察を試みる。共通点は以下のとおりである。

- (1) 教職員・生徒ともに、「学校の清掃活動が好きか」については肯定的な回答が約半数であるのに対し、「生徒が学校の清掃をすること」については大切(あるいは必要)という回答が約9割を占める。このことから教職員・生徒ともに清掃活動に対して一定の教育的意義を認めていることが考えられる。
- (2) 「清掃活動の目的」について、「学校をきれいにするため」が教職員87.5%、生徒84.5%、「みんなが使用するもの(公共物)を大切にする習慣を身に付けさせる」が教職員95.8%、生徒71%と、いずれも回答の割合が高かった。このことから、教職員・生徒ともに「きれいにする」「公共物を大切にする」という目的意識が強いと考えられる。
- (3) 「清掃活動の時間(15分間)及び回数(週4回)」について、いずれも教職員・生徒ともに「適切である」とする回答が最も多かった。
- (4) 「無言清掃のねらいが達成されているか」に関しては、教職員・生徒ともに肯定的な回答が約半数だった。教職員の自由記述にも「生徒に目的や意義が理解されていない」という意見が複数挙げられていたり、約7割の生徒が「無言清掃」のねらいについての内容がわからないと回答していたりすることからも、そのねらいが浸透していない現状が考えられる。

相違点は以下の通りである。

- (1) 「無言清掃の意義」について、教職員24人中16人(66.7%)が「無言清掃」を行うことについて肯定的な回答をしている。一方で、「無言清掃」を続けていきたいと回答した生徒は286人中104人(36.4%)にとどまっている。教職員と生徒の「無言清掃」に対する評価が一致していない現状が考えられる。

以上から、教職員・生徒ともに学校の清掃活動は一定の教育的意義があると認めているが、無言で清掃することに意義を見出している生徒は少ないことが確認できた。清掃の目的については、教職員・生徒ともに「きれいにすること」「公共物を大切にすること」を強く意識している。無言を徹底して「心を成長させる」ということを主眼に置くよりも、会話を通じて相互にコミュニケーションをとりながら、効率よくきれいにすることを目的に清掃活動を行うことも検討する必要があるだろう。「無言清掃」を行うにしても、生徒にその目的や意義を理解させた上で行わなければ、その教育効果は得られない。通年で「無言清掃」を行うと目的意識が薄れやすいため、清掃強調週間を設けて「無言清掃」を行うなど焦点化することも方法の一つとして考えられる。

#### 4. おわりに

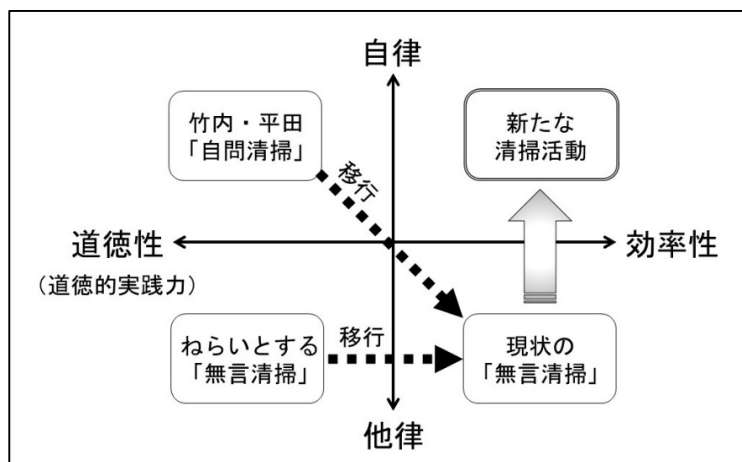
本研究では学校の清掃活動の現状を把握するために、栃木県栃木市内の公立小中学校へ実態調査を実施し、その結果を分析・検討した。さらに、筆者の勤務する中学校の教職員及び生徒に清掃活動に関する意識調査を実施し、その結果を分析・検討した。

栃木県栃木市内の公立小中学校への実態調査では、児童生徒に無言で清掃をさせている学校が多く、その目的については小学校と中学校において差異が見られることが確認できた。一方で、児童生徒に無言を徹底させることの難しさや、無言で清掃させることに対する疑問も挙げられた。

勤務校の教職員及び生徒への意識調査では、教職員・生徒ともに学校の清掃活動は一定の教育的意義があると認めているが、無言で清掃することに意義を見出している生徒は少ないことが確認できた。清掃活動の内容や方法の見直しが必要である。

最後に、これらの分析・検討を踏まえた上で学校の清掃活動(主として「無言清掃」)の教育効果についての再考を試みる。以下は、学校における清掃活動の現状を図式化したものである(図27)。

図27 学校の清掃活動の現状



十数年前ごろから栃木県南部に竹内・平田の「自問清掃」を取り入れる学校が現れ、さらに国立教育政策研究所(2006)が生徒指導の充実例として「無言清掃」を示したことで、児童生徒が無言で行う清掃が一気に広がっていった(湯本・長谷川、2022)。「自問清掃」は無言を規則ではなく活動条件としており「仕事を休んでもよい」とする指導法があるなど、自由を担保しつつ児童生徒の意志力を高めようとする(平田、2005、2012、2018)。一方、「無言清掃」は児童生徒だけでなく教職員も無言で取り組むことにより、児童生徒の規範意識の醸成を図ろうとする(小幡、1996、志水・前馬、2014)。いずれにおいても、当初は校内規律の維持や生徒の問題行動等への対応として取り入れられており、「自問清掃」と「無言清掃」の理念は異なりつつも、道徳性の育成を基盤に清掃活動が行われていた。しかし、学校の「荒れ」が落ち着くにしたがって「自問清掃」や「無言清掃」は形骸化し、清掃活動の自校化によって規律や効率性を重視した「無言清掃」へと移行する学校も見られるようになった。これは意識的に移行したというよりは、児童生徒の実態、教職員の異動、社会状況の変化等の要因が重なって自然に移行していったと考えるほうがよいだろう。栃木県栃木市内の公立小中学校への実態調査においても、こうした状況がうかがえる。また、勤務校の意識調査からも「無言清掃」の本来のねらいは「生徒の心の成長」であるが、実態としては「規律の徹底や規範意識の醸成」、「効率」のために必要な指導であると回答する教職員が多かった。学校を取り巻く状況を考慮すれば、時間をかけずにより効率的に清掃活動を行おうとするのは理にかなっているともいえる。

しかし、規律と効率性を重視した「無言清掃」は、教員による管理主義的な活動になってしまう懸念がある。児童生徒が「自分たちにとって意味のあるもの」と実感できなければ、その教育的妥当性すら疑われるだろう。清掃活動を教育的意義のあるものするには、児童生徒の自由な発想を大切にしたり、みんなでより効率的にきれいにする方法を考えたりすることが必要である。よって、自律と効率を重視した「新たな清掃活動」の在り方を目指したい。そのためには環境美化に関する委員会等の児童会・生徒会活動を軸として、児童生徒による自主的な活動へと展開できるような体制づくりが求められる。

勤務校の美化・緑化委員会において、清掃活動に関する意識調査の結果を生徒にフィードバックして感想を求めたところ、現状の「無言清掃」に対する様々な意見が得られた。「無言清掃」を続けた方がよいという意見もあったが、「清掃で必要なことは、話していいと思う。その方が清掃が効率よくなると思う。」や「無言とはせずに、そうじのこの内容ならば、少しは話しても良いと思う。」というように、簡単な会話は認めるべきという意見がその多くを占めた。清掃用具に関しては、掃除機やモップを導入するなどして短時間で効率よく清掃活動を行いたいという意見もみられた。また、新たな清掃活動の在り方について、「時間を5分くらい増やして、話し合う時間とかを作ったり、毎日じゃなくてゴミがたまりやすそうな日(月や金)に清掃したりすればいいと思う。」や「反省の時間はいららないと思う。」などの具体的な提案も出された。こうして得られた生徒の声を、清掃活動の教育的意義を問い直すきっかけとし、社会状況や生徒の実態に合っているか、生徒の主体的な活動になっているのかを見直すことが必要である。

本研究では、栃木県栃木市の公立小中学校及び勤務校を事例としたが、栃木県内の他地区の検討にまでは至らなかった。同じ県内においても地区によっては「自問清掃」や「無言清掃」を行っていないところもある。そうした地区との比較をすることで、より詳細な実態の把握が行えると考える。また、公立高等学校や私立学校の清掃活動についても検討が必要である。これらは今後の課題としたい。

## 参考文献・資料

- 沖原豊編(1978)『学校掃除—その人間形成的役割—』学事出版
- 表真美(2021)「学校清掃と生徒指導—「福井掃除に学ぶ会」の調査から—」『京都女子大学宗教・文化研究所 研究紀要』34:23-40
- 表真美(2022)「学校清掃の現状と課題—黙って掃除を行う指導に注目して—」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』4:9-16
- 小幡啓靖(1996)「豊かな人間性を育てる学校経営—「荒れた」学校再建の実践」『東京大学大学院教育学研究科教育行政学研究室紀要』15:3-20
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2006)『「生徒指導の在り方についての調査研究」報告書—規範意識の醸成を目指して—』
- 国立教育政策研究所(2017)「学校組織全体の総合力を高める教職員配置とマネジメントに関する調査研究報告書」
- 志水宏吉・前馬優策編(2014)『福井県の学力・体力がトップクラスの秘密』中央新書クラレ
- 杉原里美(2019)『掃除で心は磨けるのか：いま、学校で置きている奇妙なこと』筑摩書房
- 中央教育審議会(2019)「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について(答申)」
- 平田治(2005)『子どもが輝く「魔法の掃除」』三五館
- 平田治(2012)『学校掃除と教師成長—自問清掃の可能性—』一莖書房
- 平田治(2018)『これからの学校掃除—自問清掃のすすめ—』一莖書房
- 山本宏樹(2019)「無言清掃はどこからきたのか(特集 学校にしのびこむ「黙」)」『教育』887:82-91
- 湯本さや・長谷川万由美(2022)「栃木県南部における「無言清掃」の普及とその背景—現職教員への半構造化インタビュー調査から—」『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』72:3-20

令和4年10月3日受理





Research on the Actual Conditions  
and Educational Effects of Cleaning Activities  
in Schools  
—A Survey of Teachers' and Students' Attitudes  
toward “Silent Cleaning”—

Saya YUMOTO, Mayumi HASEGAWA